

## 朝鮮半島から見た東アジアと日本の「平和」

—韓国平和ゼミの視点—

多文化社会学部 森川 裕二

地理的にもっとも近く、さまざまな交流がありながら、日韓関係は和解と相互理解を欠き歴史問題によって絶え間なく揺さぶられ政治的な対立と摩擦を繰り返してきた。日本と韓国の「想像の共同体」=ネーションそれぞれに和解と相互理解のイメージが存在し、絶えず国境を越えたつながりをもとと努力を重ねてきたにもかかわらず、国際政治と国内政治の双方の力学のなかで、歴史問題は間歇的に繰り返す。平成29年3月13日から3日間の日程で開催した韓国スタディツアー、これに先行して実施した「朝鮮半島危機シミュレーションゲーム」、歴史認識問題・日本軍慰安婦をテーマにした「事前勉強会」は、日韓関係と朝鮮半島の過去・現在・未来から、アジアと日本の「平和」について考えることを目的に企画した。

日韓関係は、日本と東アジア諸国の関係の中でもとくに輻輳した国際関係であり、既存の権力政治の水平的な思考からでは、未来の予測はもちろん、現状分析すら心もとない。とくに国際政治学の伝統的思潮は、西欧を起源とする国家間関係の基本原則に主権国家を置きながら、主権の本質的な属性に権力（パワー）すなわち軍事力を位置づけてきた。17世紀中盤に誕生したといわれる、こうした主権国家システムの世界観の下で、国民、領土、軍事力に性格づけられる国家間の相互関係は、戦争と平和を繰り返すなかで劇的な変化を経験してきた。そして現在、国境を超える「市民」や「テロリズム」といった非国家主体が台頭するグローバル化の中でさらに流動的な状況に直面している。

しかしながら、現実の政治のなかでは、主権の本質は変わっていない。国際政治の現実も、これまでの主権国家による権力政治のゲームの継続性が今なお強く根付いている。実際に国際政治を考えると、主権の対外的関係と軍事力の問題を無視することはできない。とくに、朝鮮半島の分断と核ミサイル危機に関していうと、政治の実務レベルでは権力政治の代表的モデルである勢力均衡論や抑止論を忠実に踏襲して、「戦争のない状態」としての平和を志向しているように映る。軍事的な均衡を最大の眼目とするこれらの理論は同盟形成の政策的根拠と

して利用されており、加えて軍事力が主権の中核的構成要素に位置づけられる限りにおいては軍拡競争による戦争と平和の循環が避けられない。しかも、戦争から平和、平和から戦争へと移行する国際的な規範は、戦争の内部と平和の内部で、それぞれ別々に議論されゲームのルールが語られるため、現実の世界から大きく乖離していく。

北朝鮮の核ミサイルをめぐる国際関係もこうした伝統的な国際政治の世界のゲームとして説明可能ではある。しかし、国際関係全般を俯瞰すれば、国家間の軍事力のバランスを中心にした議論は、現代国際関係の重要な側面を見落とす陥穽にはまって、現象を説明できなくなる。

私たちが目にする、あるいは耳にする冷戦後の国際関係は、地球規模の一体性が強調される経済的な相互依存の拡大、さらに国境を越えた中長期の人口移動による国内社会と国際関係の連関と相互浸透、およびそれぞれの主権国家の政策変更は重要な争点になっており、日本と韓国と東アジアの国際関係も同様である。軍事力を主権の中心に置く伝統的なモデルに対し、移動する「市民」、NGO（非政府組織）によって冷戦後の支配と従属関係が分極化・分散化に向かう国際関係に対して、人間の主観性を考えるアプローチと体系化されたモデルが求められる。

「韓国平和ゼミ」では、これらの二つのモデルが相互連携しながら発展し変容していく世界を想定した。前者の伝統的なモデルは、軍事力の大小のみに注視しあたかもビリヤード台の上で、大小の複数のボールが転がるような水平的な関係の中で、強者と弱者・支配と従属を俯瞰的に論じる。後者は、国家以外の主体とくに人間の間主観的關係全体を包み込んだ存在論が展開される場である。ただし、これまでのように人間の間主観的關係のみを切り出して実証的に分析するだけでは、前者の権力政治の構造に閉じこまれた狭い認識論の中に人間の存在はとどまり続ける。

前者の権力政治のゲームが示す水平的関係が寄りかかってきた古典的な科学的方法論の世界は、デカルト・ニュートン的な平板な空間次元の議論である。それに対し、人間の間主観的な国際関係の次元は既存の戦争と平和を別々に議論する国際関係論に新しい視野を切り開く道につながる可能性を秘める。その可能性を引き出すために、二つの次元それぞれの限界を十分に把握したうえで、複合していく手法が有効である。

「韓国平和ゼミ」は以上のような視点から、①伝統的な視点からの、朝鮮半島核ミサイル問題の考察<sup>1</sup>と板門店視察、②間主観的人間関係からとらえた日本軍従軍慰安婦・歴史認識問題<sup>2</sup>と日韓関係、および「ナムムの家」訪問、③韓国学生（韓信大学校日本学科1年生）との対話交流の三部構成として企画した。異な

る次元からの考察を参加者がそれぞれ複合することにより、デカルト・ニュートンのパラダイムの限界をシミュレーションゲームの結果から再確認し、その現状をスタディツアーの中での板門店視察および韓国・韓信大学校学生との対話の中で検証するとともに、間主観的な人間主体の国際関係の視点を「ナナムの家」の慰安婦との交流の中で学んだ。

本特集では、近江美保教授による「ナナムの家」訪問の記録と、学生の感想、そして付属資料としてシミュレーションの結果を掲載する。

なお、スタディツアー<sup>3</sup>には韓信大学校の李起豪教授には「ソウルの歴史と現在」をテーマにしたタウン視察（慰安婦・少女像の見学を含む）を企画していただいたほか、朝鮮戦争後の韓国政治史のレクチャーをしていただいた。早稲田大学院生の鄭美香さん、ハンギョレ新聞のチョウ・ミスさんには「ナナムの家」訪問企画の調整、通訳などのご協力をいただいた。また、韓信大学校の河棕文先生には学生交流の労をおとりいただいた。記して感謝を申し述べておきたい。

<sup>1</sup> 朝鮮半島核ミサイル問題の考察では、emailを活用したシミュレーションゲームを実施した。平成28年12月3日、基礎演習B（担当・近江美保教授、森川裕二教授）履修学生ほか2人の学生が参加し、6者協議メンバー国それぞれを学生2人ずつ担当し、教員と補助学生（3年生）1人がメディア、国連関連の情報を発信した。事前準備として1994年以降の北朝鮮核開発の経緯と各国の対外政策を整理し、それぞれの国家の基本戦略をまとめたうえでゲームに臨んだ。本ゲームの結果（企画最終頁を参照）では、国際協調枠組みによる北朝鮮核ミサイル危機問題解決には至らず、各国もとの主権と国益の維持を目的に行動した結果、膠着状態のままに終わった。このゲームにより、次の二点を総括した。①伝統的な国際関係論による戦争の回避策の困難性、②国際制度論的な協調の限界—である。

<sup>2</sup> 韓国スタディツアーの事前ゼミの輪読資料は下記の通り。

①山下英愛（2008）『ナショナリズムの狭間から—「慰安婦問題へのもうひとつの視座』』明石書店、②高良沙哉（2015）「第二章 いわゆる「慰安婦」に関する軍隊の性暴力」『「慰安婦」問題と戦時性暴力 軍隊による性暴力の責任を問う』明石書店、31-55頁、③大沼保昭（2007）「21世紀の日本のあり方」『「慰安婦」問題とは何だったのか メディア・NGO・政府の功罪』中央公論新社、204-231頁、④内海愛子（2015）『戦後補償から考える日本とアジア』山川出版社、⑤「慰安婦で日韓合意 新聞社説読み比べ」『新聞ダイジェスト』第50巻、第3号、⑥「我慢の日本外交」日本経済新聞社朝刊2016年3月20日12面、⑦木宮正史（2015）「日本の安全保障と朝鮮半島—安全保障における非対称性」『朝鮮半島と東アジア』。

<sup>3</sup> スタディツアーの概要は下記の通り。

3月13日16～18時：韓国ソウル市内巡検「ソウルの歴史と現在」、3月14日10時～17時：朝鮮戦争歴史記念館～統一展望台～板門店～市内視察、3月15日：9時～18時：「ナナムの家」～ハンシン大学校島山キャンパス日本学科～水原城視察。